

「先生、浣腸で遊ばせてください」

マンションに帰宅すると、部屋の中にはすでに2人の男子生徒がいた。相川翔太と宮井文男だ。合い鍵を持っている生徒たちは、自由に瑤子の部屋を出入りすることができる。

瑤子は肩にかけたバックを食卓のテーブルの上に置くと

「先生のお尻を虐めて遊びたいなんて、いけない子たちね」

と両手を腰にあてがって仁王立ちする。

「いけませんか？」

と翔太が真顔で聞いてくる。瑤子は黙って首を横に振ると、

「お酢はいやだわ」

と長い睫をしばたたかせた。バックを置いた食卓には、グリセリン原液の瓶と酢の瓶が並べられ、硬質ガラス製の浣腸器も用意されている。そのほかに鶏卵やバナナの房も置かれていた。

「お酢を入れられるのはいやですか？」

洗面器にグリセリン原液を注ぎ入れている相川翔太が笑みを浮かべた。

「だって、お尻の中が爛れたようになって痛いよ。入れるのなら少しにしてね」

宮井文男は酢を洗面器に入れており、瓶のすべての酢を入れた。酢の刺激臭が立ちこめる。

「少しってお願いしたのに…いっぱいなのね」

瑤子は文男を恨めしそうに見やると、スカートを足下に落とした。パンティは穿いていない。

「下だけ裸でいいですよ」

翔太が全裸になろうとする瑤子を制する。下半身をむき出しにした瑤子は、

「先生のお願いを聞いてくれるかしら」

と二人の男子生徒を交互に見る。

「お願いって？」

翔太が女教師の視線をとらえた。

「縛って欲しいの…」

一瞬、きょとんとした翔太と文男だったが、すぐに嘔き出す。

「笑わないで…恥ずかしいわ」

下半身をむき出しにした姿で緊縛して欲しいとねだる女教師の顔を翔太と文男はまじまじと見てはまた笑い出す。

「すっかりマゾなんだ」

翔太が真っ赤なロープを取り出した。女教師を責める器具の数々はこの部屋に用意されている。緊縛用のロープもその一つで、どこに何が仕舞われているか瑤子の教え子たちはよく知っているのだ。それだけ頻繁に使用されていることが分かる。瑤子は両手を背中に回した。

「マゾ教師だね」

翔太がロープで後ろ手縛りにしていく。

「こんな女にしたのは、君たちよ」

縛られながら瑤子はわずかに喘ぎ声を洩らす。乳房を絞られるように緊縛されるその感覚が興奮させるのだ。

「先生は女と言うより、牝じゃないですか。マゾ牝ですよ」

「そうね、先生、牝よね。霧島瑤子は…マゾの牝だわ…」

「先生、変わったね」

緊縛の出来具合を確かめる翔太が乳房をスーツの上から揉み込む。

「変わったわ・・・先生はマゾの悦びを教育されたわ・・・先生のお尻に浣腸してくださいね」

後ろ手縛りになった瑤子は、浣腸器を誘うように突きだした臀部をゆっくりと振る。

「先生のような綺麗な女性に浣腸するのってたまらないですよね」

翔太の指がアヌスを縫う。潤滑クリームを塗るのだ。

「奥まで塗って欲しいでしょ？」

指がさらに差し込まれる。

「先生のお尻の奥まで塗ってください」

瑤子は双臀をぶるっと震わせた。

「気持ちいいんだ？」

「ええ、気持ちいいわ」

と剥き出しの双臀をさらに突き出す。

「お待ちかねの浣腸です」

文男が浣腸器の嘴先をアヌスに差し入れてきた。ピストンが押されると、冷たい薬液が流れ込む。すぐに酔の刺激が腸粘膜を刺激し始める。

「やっぱり…きついわ」

四つん這いの瑤子は、お尻の中が焼けるようだと呻き、妖艶に悶えた。

筒の中の薬液をすべて注ぎ入れた文男に代わって翔太が次に浣腸をする。

「感じているよね、先生？」

文男が四つん這いの瑤子の顔をのぞき込む。瑤子は翔太に浣腸されながら素直にうなずいた。

「3本目も飲めますか？」

翔太から受け取った空の浣腸器で洗面器の薬液を吸い上げながら、文男が聞いてくる。

「好きなようにして…いっぱい入れていいのよ…先生、恥ずかしいけど、浣腸で感じる教師だわ」

交互に浣腸され、瑤子の腹は見事に膨らんできた。

「栓をしますよ。」

押しつけられた鶏卵を瑤子は息を吐きながら呑み込んでいく。一つ二つと鶏卵が沈み合計4個の鶏卵が埋まって、強固な栓となった。後ろ手縛りのまま、ベランダに出される。ベランダの手すりに後ろ手縛りの縄尻を縛られ、瑤子は立ち姿のまま排泄を命じられた。両足を開いたその間に青いポリバケツが置かれる。

「さあ、産卵をしてください」

黒革鞭が当てられる。二本の鞭が瑤子の尻肉を打つ。マンションのベランダから外を見ながら、瑤子は鶏卵を押し出していく。アヌスから飛び出した鶏卵は見事にバケツに入った。4個の産卵が終わると、猛烈な排泄となった。バケツに激しい水流となったグリセリンと酢の混合液がたまってくる。

「先生のお尻を今、君たちのペニスで串刺しにしてよ」

立ち姿の瑤子は、アナルセックスを求めた。背後に立ったのは翔太だ。翔太の固いものが押しつけられる。瑤子は双

臀を後ろに突きだし、翔太のペニスをアヌスの奥へと誘った。スムーズな結合で、まさに串刺しにされた瑤子は、蜜をしとどに吐きながらオーガズムに陥った。ぶるぶると女体を震わせながら果てた瑤子の腰をつかんで、激しくペニスを抽送する翔太も興奮して早い射精となる。代わってすぐに文男が瑤子のアヌスに挿入した。